

セッションⅡ 落語家が収集した一枚摺の世界 【総括】

神 田 由 築*

セッションⅡ「落語家が収集した一枚摺（いちまいずり）の世界」は、国立歴史民俗博物館に御協力いただき、同館との共催で行われた。

国立歴史民俗博物館に『懐溜諸屑（ふとくろにたまるもろくず）』（以下『諸屑』と略称）という一枚摺のコレクションがある。一枚摺とは、瓦版や番付など、版木を彫って一枚の紙に摺り出された印刷物の総称である。近世日本では製版技術が発達し、瓦版や商標、引札など多種多様な一枚摺が生み出された。

『諸屑』は天保一安政期（1830-59）頃に江戸の入船扇蔵（いりふねせんぞう）という落語家が収集して柳屋秀岱が帳面に貼り付けたとされる、約3400点にのぼる本格的な一枚摺のコレクション（全28冊）である。内容が商売、世相、災害、芸能など多岐にわたることから、複数の専門領域からなる研究者の共同研究にふさわしい素材である。

そこで、平成26年度から28年度の3年間にわたり私が代表となり、都市史、美術史、そして落語など芸能史を専門とする総勢8名からなる研究者によって、国立歴史民俗博物館における共同研究「近世の一枚摺文化の受容と都市社会の研究」を推進してきた。本セッションは、その共同研究の成果の一部報告を兼ねている。

国際日本学（あるいは比較日本学）の主旨は、もちろん日本研究を通じて日本と世界の間を考察すること、ひいては日本文化を発信する手がかりを探る点にもあるが、それだけではなく、日本

における日本文化の発見をうながすねらいもある。つまり、私たちが身近であるがゆえに知らない「日本」というものを、研究を通じて見直すという意味も持っている。本セッションは、まさにそうした趣旨のもとに行われたものである。

まず午前中は、『諸屑』が落語家の収集からなるコレクションということに関連して、落語家・桂藤兵衛氏（落語協会）による高座を一席設け、「色事根問」の実演をお楽しみいただいた。

その後、藤兵衛氏と今岡謙太郎氏（武蔵野美術大学）、中川桂氏（二松學舎大学）による座談会が行われた。当代の藤兵衛氏は三代目を名乗っておられるが、近世の上方落語の名人・桂文枝の通称にちなむという「桂藤兵衛」の名跡の由来・来歴の話題から始まり、落語にみる上方と江戸との関係、落語における言葉遣いの重要性などが議論された。

続いて午後には、個別の研究発表が4本ののち、発表者によるパネルディスカッションが行われた。

研究発表の一つめは、中川桂氏による「噺家番付類に見る近世の桂文治代々」である。上方落語中興の祖といわれる初代桂文治はじめ代々の名跡をたどりながら、今回の主人公でもある入船扇蔵との比較がなされ、そもそも史料を収集した入船扇蔵とは「誰か」という問題や、当時の落語界における扇蔵の位置づけなどが明らかにされた。

落語家の代数確定は系図の混乱や情報不足などにより容易ではないが、『諸屑』の史料群の年代が扇蔵の活動時期と同じだとすれば、この扇蔵は三代目（前名は扇子）にあたるかと解明された。三

*お茶の水女子大学教授

代目入船扇蔵は、同時代に江戸で活躍した四代目桂文治と比較してもそれほど大きな名跡ではないが無名でもなく、番付でいえば中下位クラスの落語家ということが判明した。

二つめは、高橋修氏（東京女子大学）による「引札の文体考—文書伝達と口頭伝達の間—」である。高橋氏は『諸屑』に収録された、「口上」「口演」などを表題とする引札（商品・商店等の宣伝札）の文書様式に着目し、こうした一枚摺が口頭伝達の語調を文字化したもので、口頭伝達と文書伝達の間位置することを指摘した。当時、文字で書かれたものが口頭伝達されていたことをも窺わせる。一枚摺は、近世における口承文化と文字文化の関係を考えるうえでも重要な論点である。

それに関連して、江戸と大坂の比較もなされた。高橋氏は、江戸では「口演など表題」＋「手紙形式の文体」＋「商品の内容」という順番で書かれるのに対し、大坂では「口演」＋「商品」＋「手紙」の順番が多いことに注目し、口頭による商品紹介に自由度がある後者の様式が、大坂の口上（口承）文化に親和性があつたのではないかと指摘した。

三つめは、高山慶子氏（宇都宮大学）による「お竹大日如来と江戸の庶民信仰—『懐溜諸屑』を手がかりに—」である。『諸屑』には摺物の代書を引き受ける「代作屋代作」なる者の引札が収められている。戯作者による代書活動はすでに指摘されているところだが（木越俊介「“代作屋代作”花笠文京の執筆活動について」『近世芸芸』69）、高山氏は江戸で流行し一枚摺の題材にもなった「お竹大日如来」について紹介しながら、代作屋代作の引札にある「神仏開帳縁起類」「珍物見世物口上」の記述に着目し、こうした信仰や開帳のブームの背景に一枚摺作成者が深くかかわっていたことを提起した。一枚摺の製作者の問題は、今後の重要な課題である。また、入船扇蔵収集の一枚摺には、「おかひてう落しばなし」（御開帳落し咄）という落語家らしい摺物が含まれ、落語家のネタ作りと一枚摺との関連も指摘された。

四つめは、大久保純一氏（国立歴史民俗博物館）による『『懐溜諸屑』から見る江戸の絵双紙屋』である。一枚摺はどのように販売されたのか。大久保氏は『諸屑』所収の引札や掛紙（包装紙）から、刊行物の書誌情報からは検知できない小売りの局面がわかると指摘して、目薬や小間物などと一緒に錦絵や草双紙が売られていた、江戸の絵双紙屋の多様な販売形態を描き出した。こうした販売の局面もまだ追究の余地がある。

パネルディスカッションでは、まず『諸屑』の特徴として、収集時期と同時代のものがほとんどで年代が限られること、よって後代のコレクションのようにバイアスがかからず、コレクションとして良質であることが確認された。

また、高山氏の報告に関連して、入船扇蔵が単なる一枚摺の収集者ではなく、『諸屑』所収の一枚摺も戯文のネタに使用された可能性があるという話題が議論された。フロアからは『諸屑』所収のある一枚摺について、特定の作者の情報が「藤岡屋日記」にあると指摘され、今後も関連史料をひもとくことで、より周辺事情が判明することが認識された。江戸や大坂以外での一枚摺の出版事情の解明も、今後の課題である。

以上、都市史、美術史、芸能史を横断して、多岐にわたる議論が交わされた。一枚摺が提供する情報は、まだまだ限りない。国立歴史民俗博物館では『懐溜諸屑』のデータベースを作成・公開している。もし関心をもたれたら是非、国立歴史民俗博物館のサイトにアクセスして『懐溜諸屑』を覗いていただきたい。

https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/futo/db_param